







## エ 病虫害防除法（ショウガ）

### （ア）根茎腐敗病 *Pythium ultimum*, *Pythium zingiberum*

#### （防除のねらい）

種ショウガからの持ち込みと、ほ場での発病とがある。種ショウガの持ち込みの場合は生育初期までに株全体が黄変枯死することが多い。夏季の高温時、降雨が続いた後に排水の悪いほ場ほど多発しやすい。生育中だけでなく、貯蔵中にも腐敗することがある。無病種ショウガの確保が最も重要で土壌消毒、ほ場管理を含めた対策が必要である。

#### （耕種的防除法）

- （1）種ショウガは無病ほ場から選び、植付前に罹病根茎を厳重に取り除く。
- （2）排水が良好な無病地に栽培する。多発ほ場での連作は避ける。
- （3）発病株は早目に抜き取る。

### （イ）白星病 *Phyllosticta zingiberis*

#### （防除のねらい）

8～9月に発生が多い。耕土が浅く干害を受けやすく、肥料切れ状態のほ場で多発しやすい。乾燥後の降雨で新葉に病斑が急増するので、降雨後の防除が効果的である。

#### （耕種的防除法）

- （1）敷わらをする。
- （2）肥料切れをしないように肥培管理する。

### （ウ）紋枯病 *Rhizoctonia solani*

#### （防除のねらい）

種ショウガ伝染及び土壌伝染する。葉鞘に発生し、多発すると収量及び品質が低下する。植付前の土壌消毒と発病進展期に防除する。

#### （耕種的防除法）

- （1）種ショウガは無病ほ場から採種する。
- （2）多発ほ場での連作を避ける。

### （エ）腐敗病 *Erwinia carotovora* subsp. *carotovora*

#### （防除のねらい）

土壌伝染するほか罹病根茎も伝染源となる。27～30℃の比較的高温で、多湿ほ場で発生が多くなる。初期に発病する場合は種ショウガからの持ち込みによることが多く、無病種子の確保が重要である。

#### （耕種的防除法）

- （1）種子用根茎は無病ほ場から採種し、植付前には罹病したものを取り除く。
- （2）排水の良いほ場に栽培し、周辺ほ場からの雨水、土砂の流入を防ぐ。
- （3）発病株は早目に抜き取る。

### （オ）アワノメイガ

#### （防除のねらい）

8月以降の幼虫による被害が主で、10～11月は次種と混発する。ふ化幼虫は上位葉の葉鞘部から茎内に食入する。防除はふ化食入期をねらうが、第1回成虫の発生時期は長く、適期がつかみにくいので被害が目立ち始めたら散布間隔を短くする。

### （カ）イネヨトウ

#### （防除のねらい）

6～7月以降の第1～第2次茎に食入するのはイネヨトウが主で、10～11月は前種と混発して加害する。

### （キ）ハスモンヨトウ

#### （防除のねらい）

ふ化幼虫やふ化幼虫による食害痕の早期発見に努め、若齢幼虫を対象とした防除を行う。

### （ク）ネコブセンチュウ

#### （防除のねらい）

サツマイモのセンチュウ類の項参照